

週刊 武四郎

●毎月第四週は、
松浦武四郎のコレクション
についてご紹介します

第 20 号

2018 年 (平成 30 年) 8 月 22 日 (水)
発行・松阪市

監修・松浦武四郎記念館

義理の兄・三浦乾也

今回の武四郎さんのコレクションは、珍品中の珍品です。まず、箱書(収めた箱にその中身の由来を書いたもの)によると、

三浦乾也二代名工也

北海翁命造此像

又使曉斎加彩蓋可謂無雙

「三浦乾也」は一代の名工で、北海翁(武四郎さん)のことはこの像を造らせ、河鍋曉斎に彩色(色を付けること)させた」とあります。箱書を書いたのは、武四郎さんの隣の家に住んでいたので「隣翁」と呼ばれていた漢詩人の小野湖山です。

この三浦乾也が焼いて曉斎が色を付けた焼き物の像は、『妙楽菩薩』と呼ばれています。唐風の着物を着た男が酔っているのか夢を見ているのか酒樽に寄りかかっている像で、とても精巧

にできていて樽の部分はポコッと取り外すことができます。

湖山も書いている通り、三浦乾也は尾形乾山の名を継ぐ名工で、各地の殿様に呼ばれては殿様の目の前の庭先で焼き物を焼いてみせる席焼きで大人気でした。黒船来航時には、

席焼きの場で洋式軍艦の模型を造って時の老中阿部正弘に献上したところ、長崎でオランダ人から造船技術を学ぶようにという命が下り、長崎海軍伝習所がはじまる半年も前からオランダ人に造船技術を学ぶことになりました。そして、仙台藩の依頼により、へ開成丸」という洋式軍

艦を本当に造ってしまうのです。一介の陶工が本当に海に浮かぶ西洋軍艦を造れるものなのか首を傾げたくなりますが、実は小説より奇なり……仙台にはちゃんと、この開成丸の記録が残っています。その後、山っ

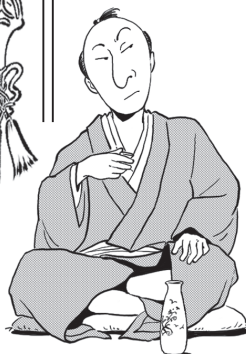


▲妙楽菩薩 (松浦武四郎記念館蔵)

気たっぶりの乾也は様々な事業に手を出して失敗、義弟の武四郎さんは、生涯その生活の援助をしました。武四郎さんも相当の奇人ですが、義兄の乾也は輪をかけた奇人奇才だったようです。この妙楽菩薩像の製作も、義兄の生活を見かねていた武四郎さんなりの援助の一環であったのかも知れません。おかげで作品が極端に少ない明治の名工と、売れっ子絵師の世にも稀なるコラボ作品が残されることになりました。

松浦武四郎 (1818 ~ 1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として「北海道」のもととなる「北加伊道」を含む6案を政府に提案したことから「北海道の名付け親」と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』(河治和香著)が、小学館より好評発売中!